

英語の冠詞指導を目的とした冠詞体系の構成要素と構造の検討

町田 佳世子

札幌市立大学大学院デザイン研究科

抄録：本研究は、英語の冠詞というカテゴリの構成要素は何か、そしてそれぞれの構成要素がどのような関係によって冠詞体系の中に位置づいているのかをこれまでの冠詞研究や文法書の記述に基づいて検討し、日本人英語学習者に対する英語冠詞体系の指導のための教育内容を構成することを目的としている。これまでのところ何を冠詞とし、それらの意味・機能の違いがどのような次元において記述されるかについては理論的にも実践的にも必ずしも見解が一致していない。そのことが体系的な冠詞指導の実現を滞らせ、冠詞の習得をより困難にしていると考ええる。

本稿では、冠詞指導における冠詞カテゴリは、*a/an*, *the*, 強勢のない *some* と *any*, そして表層的には無形の2つの冠詞、すなわち不定を標示する *zero* 冠詞と定を標示する *null* 冠詞の5種類から構成されたとする。また冠詞体系を、DEFINITE/INDEFINITE, COUNT/MASS, EXTENSIVITY の3次元から成る体系とし、COUNTの下位次元として SINGULAR/PLURAL を位置づける。COUNT/MASS の次元では、 \pm divisible, \pm merge-able, \pm homogeneous の素性によって指示対象が *count* か *mass* かの判断が行われる。EXTENSIVITY の次元は、数量的な意味合いをもつ *a/an*, *the*, 強勢のない *some* と *any* が、クラス・種類の解釈をもつ2つの無形の冠詞と区別される次元である。DEFINITE/INDEFINITE の次元は、談話の領域において指示対象を定として聞き手に示すかどうかの判断を \pm locatable と \pm inclusive の素性を用い行う次元である。これらを教育内容とした上で、英語冠詞の指導は、まず話し手と事物の領域にある COUNT/MASS および EXTENSIVITY の次元における冠詞の対立をもとに不定の冠詞の意味と機能を説明し、引き続いて DEFINITE/INDEFINITE の次元での *the* の指導に進んでいくことを提案する。

キーワード：冠詞, Count/mass, Definite, Indefinite, Extensivity

A Study on Constituents and the Multi-dimensional Structure of the English Article System: With the Purpose of Designing Systematic Article Instruction

Kayoko Machida

Graduate School of Design, Sapporo City University

Abstract: This study aims to examine what constitutes the category of English articles and on what dimensions the articles are opposed to each other for the purpose of establishing the contents and sequences of instructing English articles to Japanese learners. There is still little agreement on what the article system comprises of and how we can describe their meanings and functions of articles in the theoretical and practical research. Therefore successful instructional outcomes are rarely accomplished.

In this study I propose that the category of articles should include *a/an*, *the*, unstressed *some* and *any*, as well as two invisible articles: an indefinite zero article and a definite null article. Furthermore, the meanings of these articles can be described and understood based on various features they employ

regarding the three main dimensions: DEFINITE/INDEFINITE, COUNT/MASS, and EXTENSIVITY. The COUNT/MASS dimension subsumes three binary systems of \pm divisible, \pm merge-able and \pm homogeneous. These dichotomies enable the learner to distinguish a unit entity from a mass entity. A traditional SINGULAR/PLURAL distinction is treated simply as a sub-dimension of COUNT. The EXTENSIVITY dimension distinguishes qualitative articles of *a/an* and unstressed *some* from a categorical article of zero article. The DEFINITE/INDEFINITE dimension is explained by the two binary systems: \pm locatable and \pm inclusive. Based on these considerations, this study proposes, contrary to the conventional instruction of indefinite *a/an* versus definite *the*, that a systematic instruction of articles should start with indefinite articles of *a/an*, unstressed *some* and *any* and zero on COUNT/MASS, EXTENSIVITY dimensions, then continue to the instruction of the DEFINITE/INDEFINITE dimension where *the* and the null article are introduced and explained.

Keywords: English articles, Count/mass, Definite, Indefinite, Extensivity

1. 研究の背景と目的

冠詞は、英語を学習する日本人にとって習得がむずかしい項目の代表格である。会話のように場に埋め込まれたやりとりにおいては、冠詞の不使用・誤用は意識されにくい。しかし英語を書くとなると冠詞の誤用や不使用が顕在化し、内容そのものが誤解されて伝わってしまうこともある⁽¹⁾。

日本人の英語学習者が冠詞を適切に使えない理由として、日本語にはない発想であることや、会話などのコミュニケーションの際に冠詞使用の間違いはあまり大きな問題にならないことから、近年のコミュニケーション重視の風潮の中ではほとんど重要視されてこなかったことなどが挙げられてきた。しかし最も大きな理由は、中学校から高校までの英語学習の期間に、冠詞についての「体系的な説明が先送りされ、結局何の説明も学習もされないままに終わってしまう」⁽¹⁾ ことではないかと考える。

英語の冠詞は、それぞれの冠詞が1つでいくつもの意味構造や談話構造の情報を担い、それを同時に標示するという複雑さを持つ。さらに冠詞は *the* であっても *a/an* であっても、音韻的に小さくそしてほとんどの場合弱形 (weak form) で発音されるため、コミュニケーションの中で学習者自身が使い方を学んでいくには限界がある。また日本語とは違う発想や文法システムであればこそ、「まず知的に把握・理解して、しかるのちいろいろな手立てを講じて習熟していくのが効率的である」⁽²⁾ と考える。それゆえに文法項目として体系的な説明に基く指導が英語学習のいずれかの段階で行われることが、冠詞の習得に不可欠なのではないだ

ろうか。冠詞を体系的に指導するとは、それぞれの冠詞の意味的・談話的情報を構造的に捉え、その構造において他の冠詞とどう対立しているのかを説明することであり、そのための教育内容を構築しなければならない。従って、本稿ではまずこれまでの英語冠詞の諸理論や研究成果の検討を行い、その結果をもとに冠詞体系指導のための教育内容構成を行うことを目的とする。

2. 冠詞体系の理論的考察

英語話者が文脈や状況に応じて最も適切な冠詞を選択しているとすれば、何らかの根拠をもって複数の可能な冠詞の中から、その冠詞1つだけを選択し、他を選択しなかったことを意味する。すなわちそれぞれの冠詞は系列的関係 (paradigmatic relation) にあるということである。それゆえに、冠詞は1つの体系をなし、同じ体系に属する同種の要素との関連においてその特性を知ることのできる存在である。

体系をなすということは、その体系を構成する要素があり、各要素が様々な意味構造の次元や談話構造の次元の中で互いに対立したり一致しながら関係づけられていることを意味する。従って冠詞体系の構成要素は何か、そしてそれらがどのような関係によって体系の中に位置づいているのかを明らかにする必要がある。本節では、長い歴史のある冠詞研究や文法書の冠詞の記述を検討し、冠詞体系の教育内容を構成するための基礎となる冠詞体系の全体像を考察する。

1) 冠詞体系の構成要素

英語の冠詞のカテゴリに何が含まれるのかについては、これまでのところ言語学者、文法学者の間でも、必ずしも明確な一致はない³⁾。しかし多くの研究が名詞句の形式として、a/an + N (名詞), the + N(s) (名詞の単数形式もしくは複数形式)に加え、 ϕ + N(s) の3種類を想定し^{1)4)~10)}、さらにその大半が、 ϕ + N(s) の形式は冠詞が生起していないのではなく、表層的には無形の zero 冠詞が生起しているとする立場をとっている。たとえ目には見えなくても(耳には聞こえなくても)ある冠詞が生起しているとみなし、それを zero 冠詞と呼ぶことの意義は、Downing (2015) が「その不在が文法的に重要であるので、ゼロ冠詞と呼ばれる。ゼロは、新聞の見出しのように冠詞が省略されたのではなく、それ自体一つのカテゴリである」¹¹⁾と述べるとおりであり、冠詞体系の一貫した説明のためには、zero 冠詞を想定することは非常に重要であると考えられる。

これら3種類の冠詞、a/an, the, zero 冠詞と名詞との共起関係は、DEFINITE/INDEFINITE (定・不定), COUNT/MASS, SINGULAR/PLURAL (単数・複数)の3つの次元と組み合わせて次のように表されることが多い。

表1 3種類の冠詞と名詞の共起関係

	DEFINITE		INDEFINITE	
	COUNT	MASS	COUNT	MASS
SINGULAR	the boy	the coffee	a boy	(zero) coffee
PLURAL	the boys		(zero) boys	

しかし、これら3種類の冠詞だけで冠詞+名詞の名詞句の指示作用を説明しようとする、(1)の *a melon* を複数にした場合の (2) の (zero) *melons* が不自然であることを説明できず、*a melon* の複数相当語句 (plural equivalent) は何かという問題が生じる。(2) が自然な文として発話されるのは、(3) のように、他の種類との対比が音律的に含意されているときだけだからである¹²⁾。

- (1) I've just bought *a melon*.
 (2) ? I've just bought *melons*.
 (3) I've just bought *MELONS* (but not grapes).

また (4) と (5) も、specific/non-specific の読みという点で *young psychiatrists* は *a young psychiatrist* の複数相当語句と言えない¹³⁾。

- (4) Minnie wishes to talk with a *young psychiatrist*.

- (5) Minnie wishes to talk with *young psychiatrists*.

(4) の *a young psychiatrist* は specific と non-specific 両方の読みがあるのに対し、zero 冠詞が生起している (5) の *young psychiatrists* は、non-specific の読みだけが可能である。従って指示名詞句 (referring noun phrase) の指示対象の specific/nonspecific における曖昧性の有無という点からも、a + N と zero + Ns は異なる性質を持ち、a + N の複数相当語句が必ずしも zero + Ns ではないことがわかる。しかし、強勢のない some を用いた (6) は自然な文であり、(7) は (4) と同様に specific/non-specific 両方の読みを持つ。このことから、a+N の複数相当語句は some + Ns と考えることができる。

- (6) I've just bought *some melons*.

- (7) Minnie wishes to talk with *some young psychiatrists*.

強勢のない some (/səm/) とその non assertive variant (否定文や疑問文など断定が行われない場合の変異形) である強勢のない any (/əny/) を冠詞体系の成員として扱うことについては、必ずしも見解が一致しているわけではない。明示的に冠詞として冠詞体系の中を含める立場と⁸⁾⁹⁾¹⁴⁾、不定冠詞と類似の意味や機能をもつ限定詞 (determiner) として冠詞の説明にとりこむ立場^{12)15)~17)}、さらには some と any の役割が a/an と同じ場合があることを認めながらも、あくまでも存在限定詞であり不定冠詞の1つとして認めることに反対する立場もある¹⁸⁾。しかしたとえ強勢のない some と any が不定冠詞と類似の意味をもつ限定詞か、それとも冠詞そのものかの見解の違いはあっても、その機能が冠詞の機能に相当するものであることはどの立場でも認めている。そして冠詞体系を指導していく上でも、a/an や zero 冠詞の意味・機能を説明するためには、強勢のない some/any との対比が必要である。従って、本稿では、冠詞体系の構成要素として、a/an, the, zero 冠詞に加えて、強勢のない some と any (以下、強勢のない some を *some* と表記し、特に断りがな

いかぎり *some* の表記には、強勢のない *any* も含む) を含めることとする。

次に、名詞の前に有形の冠詞が生起していないという点で形式的には同じだが、一方は不定で他方は定という明らかな違いがある (8) の *music* と (9) の *Sid* を考えてみる¹⁹⁾。

(8) I like *music*.

(9) I like *Sid*.

冠詞体系を *a/an*, *the*, *zero* 冠詞, *some* の 4 種類とすれば, *music* と *Sid* のどちらにも *zero* 冠詞が生起していることになるが, そうであれば *zero* 冠詞が不定の冠詞であると同時に定の冠詞でもあるという問題が生じる。このような問題に対して, 固有名詞は普通名詞と異なり, いかなる冠詞も持たない (*has no article*) とすることで, *music* は *zero* + *N* の不定名詞句, *Sid* は無冠詞の定名詞句であると説明されてきた⁸⁾¹²⁾¹⁴⁾。この説明は *zero* 冠詞が定と不定の両方の解釈を生み出すという問題は回避するが, (10) のように固有名詞にも *a*, *the*, *some* が生起することと, 固有名詞以外の名詞でも有形の冠詞が生起しない定名詞句があるという 2 つの問題に対応できない。例えば (11) ~ (13) の *captain*, *chairman*, *director* のいずれも *the captain*, *the chairman*, *the director* も容認可能であるため, 定の名詞句であることが確認できるが, 有形の冠詞は生起していない。

(10) There is a *Mr. Smith* at the door who wants to see you.

(11) *Maureen* is *captain/the captain* of the team.

(12) As *chairman/the chairman* of the committee, I declare this meeting close.

(13) He soon became *director/the director* of the firm.

Downing(2015) は, *secretary*, *queen*, *director*, *head* などが主語補部として機能し, 唯一的な社会的役割を指示する場合は, *the* もしくは *zero* によって定性がマークされると述べるが²⁰⁾, それでは *zero* 冠詞が定も不定も表すという最初の問題に立ち戻ってしまう。そこで Chesterman(1991) は, (9) の *Sid* や (11) ~ (13) の名詞句には, 無形だ

が定の意味をもつ冠詞が生起していると想定し, それを *null* 冠詞と名付けた²¹⁾。Zero 冠詞と *null* 冠詞はどちらも目に見えないが, どちらが生起しているかを制限的用法の関係節の付加などの方法により区別することができる²²⁾²³⁾。

(14) I like *cheese*.

(15) I like *cheese* which is made of goat's milk.

(16) I like *London*.

(17) *I like *London* that the tourists see.

(15) の *cheese* のように *zero* 冠詞が生起している名詞句には制限的用法の関係節によって修飾されても非文とならないが, *null* 冠詞が生起している *London* は制限的用法の関係節によって修飾されると非文になることで, どちらの冠詞が生起しているかがわかるのである。

これまでの考察から, 英語の冠詞の指導において, 冠詞の意味・機能そして名詞との多様な共起関係を一貫して説明していくためには, 冠詞体系の構成要素を, *a/an*, *the*, 強勢のない *some/any* および表層的には無形の *zero* 冠詞と *null* 冠詞の 5 種類の冠詞とすることが必要であり, それをもとに教育内容構成をすることが重要と考える。

2) 冠詞体系を構成する次元

冠詞の指導の中では, 各々の冠詞の意味や機能は, 記述的に表現されることが多い。例えば, ある高校教科書は「初めて話題に出るものや, 聞き手・読み手がそのものを特定できないものが単数の場合は, 数えられる名詞の前に *a/an* を付ける。複数の場合や数えられない名詞の場合は *a/an* を付けない。話の中ですでに出てきたものや, 聞き手・読み手が何を指しているのかが特定できるもの場合は, 名詞の前に *the* を付ける」と説明し, 表と例を掲載している²⁴⁾。説明の対象となるのはほとんどが *the* と *a* の用法で, こういう場合には *the*, こういう場合には *a* と説明される。しかし冠詞は, それぞれがばらばらの意味を持っているのではなく, いくつかの次元において相互に対立したり一致する関係によって捉えられる存在である。従って冠詞の意味や機能は, 各次元での二項対立により表示され説明されることが適切と考える。そこで本節では, 5 種類の冠詞それぞれが, どのような次元においてどのように対立している

のかを考察し、そこから各冠詞の意味と機能を明らかにしていく。

冠詞研究の多くは、冠詞の用法を、DEFINITE/INDEFINITE, COUNT/MASS, SINGULAR/PLURAL の3次元で説明している。本稿で検討してきた5種類の冠詞をその次元にあてはめるとすれば表2のようになる。

表2 3種類の次元上での5種類の冠詞の分布

	DEFINITE		INDEFINITE	
	COUNT	MASS	COUNT	MASS
SINGULAR	the book (null) John	the coffee	a book	(zero) coffee some coffee
PLURAL	the books		(zero) books some books	

しかしこのような3つの次元では、zero冠詞の本質的な機能が十分説明できないという問題が残る。なぜならzero冠詞はmassでsingularの場合にも、countでpluralの場合にも用いられるため、zero冠詞はcountもmassもsingularもpluralも標示する冠詞となり、zero冠詞特有の意味が見えてこないのである。またsomeとzero冠詞は(2)(6)および(18)～(20)のように交換可能ではない場合と交換可能な場合があることから、どのようなときに有形の冠詞であるsomeが使われ、どのようなときに無形の冠詞のzeroが適切になるのかも説明できない。

- (2) ? I've just bought *melons*. (zeroは不自然)
 (6) I've just bought *some melons*.
 (18) Would you like (some) *coffee* or (some) *tea*? (どちらも容認可能)
 (19) I've always preferred (*some) *coffee* to (*some) *tea*. (someは容認不可能)
 (20) The table has (*some) *oak legs*. (someは容認不可能)

そこで、すべての冠詞の振る舞いを説明するためには、DEFINITE/INDEFINITE, COUNT/MASS, SINGULAR/PLURALに加え、有形の冠詞と無形の冠詞の意味・機能の違いを説明する次元として、EXTENSIVITYの次元²⁵⁾を加えることが必要なこと、そしてそれぞれの冠詞が各次元においてどのような特徴をもつかを論じていくことにする。

EXTENSIVITYの次元

古くから、a/an, the, some, zero冠詞について、

有形の冠詞(a/an, the, some)を伴う名詞句は数量的な解釈をもち、無形の冠詞(zero冠詞)を伴う名詞句は、そのような数量的解釈をもたず、種類²⁶⁾、クラス²⁷⁾、タイプ²⁸⁾、集合²⁹⁾を示すことが指摘されてきた。(21)の*Some seats*は2席以上残っていなければ使うことはできない一方で、*Seats*はたとえ残席が1席になってしまっても使い続けることができる。(22)の*buy some stamps*は全員が2枚以上切手を買ったことを意味するが、*buy stamps*は、全員が切手と呼ばれるものを買うことだけを意味し、1枚買った人もいれば複数枚買った人がいてもよい³⁰⁾。

(21) *Some seats / Seats* are available at fifty dollars.

(22) Everybody went to the post office to buy *some stamps / stamps*.

Chesterman(1991)はこのように数量的な解釈をもつか、種類・クラスの解釈を持つかの違いを表す次元をEXTENSIVITYの次元と呼び、その次元の素性を±limited extensivityとして、その素性について有形の冠詞と無形の冠詞が対立していることを示した³¹⁾。EXTENSIVITYの次元においては、zero冠詞の意味は、「ある名詞がそのもっとも抽象的な意味で用いられていることを示している。厳密に言えば、zero冠詞が意味するのは、意味内容(significate)がその潜在能力と同等の範囲をもっているということ」であり、有形の冠詞が生起することは、「その概念に形を与え、離散した存在物もしくは存在物の集合として呈示すること」³²⁾だと説明される。この対立は、研究者によって様々な表現で取り上げられている³³⁾。

Christophersen(1939)は、zeroが使われているときは、その名詞が意味する事物の外延領域全体を示し量的な限界はなく、theが使われているときは、全種族よりも狭い範囲を指し示すと述べている³⁴⁾。その他にも「物質の総体もしくはクラスか、その物質の一例もしくはクラスの成員」³⁵⁾、「その名称で呼ばれる全部か、全部のうちの1つ、つまりある種類に属するものの1つ」³⁶⁾、カテゴリー的な意味と数量的な意味³⁷⁾、タイプやクラスの解釈と数の制限を課す解釈³⁸⁾のように無形の冠詞と有形の冠詞の違いが述べられてきた。名詞の外延全体に対する指示と部分に対する指示という対立は、主にzero冠詞を

想定して述べられてきたが、もう1つの無形の冠詞である null 冠詞にも適用される。Null 冠詞が生起する固有名詞を例にとると、固有名詞の指示対象はその名をもつ人物・事物である。そしてその指示作用の全体はまさにその人物・事物であるので、null + 名詞は、その名詞によって指示が可能な対象全体を指し示していることになるのである。

これらのことから、無形の冠詞と有形の冠詞の対立は、その名詞の可能な指示対象の総体（すなわちその名詞で呼ばれるクラス・種類）か、その中のある数量的な制限を課された成員や部分への指示かで対立していると言える。

COUNT/MASS の次元

これまで多くの研究が count か mass かの区別を、名詞の分類として扱ってきた⁽²⁾。Jespersen(1926)は名詞を thing words（事物語）と質量語（mass words）に分類し⁽³⁹⁾、Christophersen(1939)は、その分類を単位語（unit words）と連続語（continue-words）と名付けた⁽⁴⁰⁾。この伝統は以降も続き、学校文法にも、普通名詞は数えられる名詞と数えられない名詞に分類され、それにより冠詞や限定詞との共起関係を説明するという考え方が取り入れられている。

しかしこのような二分法では、多くの名詞が count としても mass としても用いられるという言葉事実にそぐわないことから、Quirk et al. (1985)は、普通名詞を count nouns, noncount nouns, そしてどちらにも属する（to have dual class membership）名詞の3種類に分類した⁽⁴¹⁾。しかし実際には、例えば count noun とする語彙素 book も状況によっては noncount noun として用いることが可能であり、noncount noun の bread も count noun として用いられること、また固有名詞も a Sid のように count nouns と同じ振る舞いをすることもあるので、それぞれのクラスのメンバーシップはあいまいである。冠詞の指導の観点から考えても、ある名詞は count noun なので a/an と生起するが、場合によっては mass noun として用いられるのでその場合は a/an と共起できないとか、固有名詞は a/an を伴わないが、場合によっては a + 固有名詞という使い方もできる、という説明は一貫性を欠き不適切である。

そのような問題に陥ることなく冠詞の用法

を一貫して指導していくために、本稿では、Huddleston(1984)に基づき、count/mass の区別は、名詞の分類ではなく、名詞が使用されたときの解釈の違いであるとの立場をとる⁽⁴²⁾。Huddleston(1984)は、名詞の可算性（countability）は純粋に統語論的なものであり、様々な限定詞（determiners）との共起可能性によって、それぞれの名詞の可算性の程度が示されるとする。そして語彙素 bread, book, Sid はいずれも a/an と共起することも、単数の形式のまま zero 冠詞や null 冠詞と共起することもできるので可算性の程度においては同じであり、count とか mass の概念はその名詞が実際に使用されたとき、count の解釈をもつのか mass の解釈をもつのかの区別として捉えられる⁽⁴³⁾。本稿で count/mass というときも、名詞が count noun か mass noun かなのではなく、その名詞による指示対象が count の「存在様態」⁽⁴⁴⁾をもつか、あるいは mass の存在様態をもつかの区別を意味するものとする。

英語の不定名詞句は、それが指し示すものが count の存在様態か mass の存在様態かの判断を必ず標示している。不定冠詞 a/an, some, zero 冠詞はその標示方法として機能するのであるから、指示しようとする対象が count としての存在様態を持つのか、mass としての存在様態を持つのかを判断できるようになることが、不定冠詞の選択の前提となる。

COUNT/MASS の次元において、count と判断される対象は、「離散的で数えることが出来る存在」⁽⁴⁵⁾、「何か単一であり、それ自身で完結している物、すなわち一個のものというか、同じ種類の一族に属している一単位というような考えを呼び起こすもの」⁽⁴⁶⁾⁽⁴⁷⁾、「同じ種類のより小さい部分に分割できないという意味で原子的（atomic）」⁽⁴⁸⁾、「境界づけられた、もしくは個体化されたという解釈をもつ」⁽⁴⁹⁾と説明されてきた。一方で mass については、「連続していて、空間的、時間的に無限に広がっているものとして感知されるもの」⁽⁵⁰⁾、「未分化な統一体」⁽⁵¹⁾、「恣意的な分割が可能」⁽⁵²⁾と説明されてきた。いずれも共通しているのは、count の場合は、なんらかの明確な境界をもつ個体であること、そして mass の場合は連続し分割可能であることである。しかし指導という観点から見ると、境界づけられるとか個体としての形をもつとか恣意的な分割が可能、というだけでは count/mass の区別を十分にはでき

ないように思える。たとえば、境界づけられたものは、決して count の存在だけではない。名詞句 *some chalk* や *some cheese* は mass の解釈を持つが、チョークやチーズも現実世界の中では他と空間的に境界づけられているのであるから、それらを count の存在物と考える学習者がいるかもしれない。Furniture や crockery などは、一つ一つ明確な境界をもつ机、椅子、ベッドなど、もしくは小皿、大皿やカップなどで構成されているのであるから、furniture や crockery が mass の解釈をもつことは直感と反する。Count の存在物とされる個体としてのリンゴ (an apple) は、食べ物としてのリンゴという性質を変えることなく好きなように分割できる。しかし分割可能であることは mass の存在物をもつ特徴なのである。

そこで本稿では境界づけられているとか、個体・単位としての存在とはどういうことなのかを改めて考えるために、count という用語に立ち返り、人間の認識の中で数えられるものとして認識・知覚されるものとは何かという観点から考えてみる。

数学者の遠山啓は分離量と連続量について次のように述べている。「分離量はそのなかにある1つが、これ以上分けられないこと、そしてお互いに独立していて、つながらないということが条件です・・・これに対して連続量というのは・・・無限に分割が可能です。分割が可能である反面、いくらでもつなげることができます・・・このように無限分割可能性と合併可能性を持ったものを連続量とよびます」⁵³⁾。これを英語の count/mass の区別に関連づけると、count の「境界づけられている」とか「個体」ということは、分割ができないだけでなく、互いに独立していて、つながらないということとなる。また mass の「連続し、分割可能であること」は、無限分割可能性と合併可能性をもつということになる。この考察は、Bloomfield(1939) による bounded nouns (境界づけられた名詞) と unbounded nouns のそれぞれの類の意味 (class meaning) が、細分割すること (subdivide) と合併すること (merge) ができないか・できるかで区別されていることと一致する⁵⁴⁾。これらのことから、COUNT/MASS の次元は、 \pm divisible と \pm merge-able の素性をもっていると言える。

さらに Wierzbicka (1988) が、Spinoza の「数という点でものを考えるのは、それらが共通の属

に還元された後である」を引用した Frege に基づいて、数えることができるためには、分離された個体の存在だけでなく、それらの個体と同じ種類のものであることが要求されると述べている⁵⁵⁾。この同種性 (homogeneity) という要件があるからこそ、furniture は、それを構成する個々のテーブルや椅子はそれ自身それ以上分割や合併をできない個体性を持つてはいるが、互いの同種性がないため mass として認識され、*one furniture, *two furnitures のように数えることもできないのである。この同種性という素性を COUNT/MASS の次元に含め、本稿では、指示対象の存在様態が count か mass かの判断は、 \pm divisible, \pm merge-able, \pm homogenous でどのような値をとるかに基づいて行われると考える。

SINGULAR/PLURAL の次元

名詞句の中で単数・複数の区別を標示するのは冠詞ではなく名詞の語尾である。しかし冠詞と名詞の共起関係を論ずる際には、COUNT/MASS, DEFINITE/INDEFINITE の区別と共に、SINGULAR/PLURAL の区別は必ず取り上げられる。

冠詞の指導においても、指示対象が count の場合は1つか1つより多いかを判断し、1つなら $a + N$, 1つより多い場合は *some + Ns* もしくは *zero + Ns* を用い、指示対象が mass の場合は数えることに意味がないのであるから（あるいは数えられないものなのだから）1つか2つ以上かなどは考える必要はなく、すべて単数形式で *some + N*, *zero + N* となる、という説明がなされる。しかし、mass は単数と教えるのは mass に「1つ」という概念を押しつけることになり、個体を連想させたり本来の mass の特徴を曖昧にするおそれがある。

そもそも個体性をもたない mass の存在物を、複数形式と対立する単数形式で標示する不自然さに対して、織田 (2002:4, 2007:7) は、mass の場合の名詞語尾を、count の場合の単数形式とは異なる「ゼロ数形」と呼び区別している⁵⁶⁾⁵⁷⁾。また言語事実として、mass として用いられた名詞、例えば *May I have some tea?* の *tea* が単数形の語尾と同じ形をしていることについて Christophersen (1939) は以下のように述べている⁵⁸⁾⁵⁹⁾。

単数とか複数とかいう考えは純粋に心理的な立場からは連続語には縁のないものである。英語にはこの二種の数しかないので、連続語がそのうちのどちらかを選ばねばならないが、単数の方が自然であるから、多くの場合単数の形をとる。

これらのことから、指示対象が count である場合の名詞の単数形式と mass の場合の名詞の形式は同じ意味合いをもつのではなく、本来の数の対立を標示しているのは指示対象が count と判断された場合だけと考えることができる。従って本稿では、SINGULAR/PLURAL の次元は、COUNT/MASS の次元において COUNT と判断された先にある下位次元であると提案する。Mass の解釈をもつ名詞が、単数形と同じ形式を用いるのは、あくまでも英語という言語が 2 つの形式しか持たないという形式上の制約のため、無標の単数形式を選んだ結果であるとの立場をとることとする。

DEFINITE/INDEFINITE の次元

Definiteness (定性) に関する冠詞の用法については、これまで多くの研究があり、familiarity (親和性)、identifiability (同定・識別可能性)、uniqueness (唯一性)、inclusiveness (包括性) などの概念で説明されてきた⁶⁰⁾。しかし、(23) の場合、*the wickets* は複数であり、唯一のものではないこと、(24) では、そこに犬がいることを聞き手が知らなくても、すなわち familiarity がなくても *the* の使用が可能であること、(25) の *The bride* が、具体的に誰かを聞き手が同定 (identify) できなくても *the* が使用できること、(26) の *the only member of the group who didn't enjoy it* の指示対象を identifiable とすると、実際にその人物を identify している名詞句の Jill について、その指示作用をどのような用語で記述するのか⁶¹⁾ という問題が指摘された。

(23) Bring *the wickets* in after the game of cricket.

(24) Beware of *the dog*.

(25) I've just been to a wedding. *The bride* wore blue.

(26) *The only member of the group who didn't enjoy it* was Jill

冠詞の指導の観点からも、familiar (なじみがある) とはどのような場合か、identify (同定・識別) できるのはどのような場合かの説明がないまま、指示対象になじみがあったり、同定・識別可能であれば *the* を用いると言うだけでは不十分である。また誰にとってなじみがあるもしくは同定・識別可能なのかを説明せずに、なじみがあったり、同定・識別可能なものには *the* を使うと指導すると、話し手は自らが話そうとする対象については十分ななじみがあり同定できているので、不適切な *the* の多用につながってしまう。

そのような中で Hawkins (1978, 1999) は、発話行為理論を用いて、聞き手という存在を明示的に表示し、inclusiveness (包括性) と locatability (共有集合の中での発見可能性) という 2 つの概念を導入することで、DEFINITE/INDEFINITE の次元での冠詞の用法を論じている点で特徴的である⁶²⁾⁶³⁾。Hawkins (1978) は定冠詞について、次のように述べている。

話し手は定冠詞を用いる際、以下の行為を遂行する。話し手は、(a) 聞き手との間に指示対象を導入する、(b) その指示対象をある共有集合の中に見出すよう聞き手に指示する、(c) その共有集合内にあつて、当該指示表現を満足する事物もしくはかたまり (mass) の総体を指示する⁶⁴⁾。

Inclusiveness の概念は、uniqueness の概念の限界を解決し、locatability の概念と合わせて、聞き手にとって同定・識別可能もしくは十分に限定する (defining) とはどういうことかの説明を可能にした。さらに Hawkins は上記の発話行為が成功するための条件として、共有集合存在条件、共有集合同定条件、共有集合成員条件、共有集合構成条件の 4 つを設定し⁶⁵⁾、共有集合という概念が inclusiveness と locatability の判断に根本的な役割を果たすことを示している。

Hawkins (1978, 1999) の理論をもとに⁶²⁾⁶³⁾、Chesterman (1991) は、inclusiveness と locatability において、各冠詞がどのような特徴を持つかを \pm inclusive と \pm locatable という素性に対する値として 図 1 のように示している。 $+$ はその素性をもつこと、 $-$ はその素性をもたないこと、そして \pm はどちらもあり得ることを示している⁶⁶⁾。

	Locatable	Inclusive
zero	—	±
some	±	—
a	±	—
the	+	+
null	+	+

図1 各冠詞の Locatable と Inclusive における値
(出典: Chesterman, 1991:68 をもとに一部改変)

The の特徴は + locatable, + inclusive, すなわち the + N(s) の指示対象は、話し手と聞き手の共有集合の中に存在し、かつそれらを包括的に指示しているということであり、その結果指示対象が聞き手によって同定・識別可能になる。一方で a/an, some については、± locatable, - inclusive であるため、共有集合の中に指示対象が存在する場合と存在しない場合があり、かつ包括的な指示は行っていないため、聞き手が同定・識別できない対象を指示していることがわかる。

Hawkins の理論の重要な概念である共有集合については、Hawkins (1978) は大きく 5 つの方法で組織されると述べている⁶⁷⁾。

(27) Hawkins (1978) による共有集合組織方法

Anaphoric uses (前方照応)

Immediate situation uses (発話の直接的な場面)

Larger situation uses (発話の広範な場面)

Associative anaphoric uses

(先行する談話の中の表現からの連想)

The 'unfamiliar' uses of the definite article in noun phrases with explanatory modifiers

(後置修飾句・節や名詞句補部などの説明的修飾語を伴う名詞句)

話し手と聞き手の間で共有集合がどのようにして組織されるかについては、引き続きいろいろな分類が試みられていて一致した見解はない。Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999) は、場面・文化ベース、テキストベース、言語構造ベースに大きく分け、その元に全部で 10 通りの下位カテゴリをおいている⁶⁸⁾。Downing (2002) は、談話内、談話外の文脈や場面の中、一般的知識の 3 つとしている⁶⁹⁾。石田 (2002) は、外界照応と、2 種類のテキスト内照応 (前方照応と後方照応) の 3 種類に大きく分け、外界照応には 3 種類の下位分類、テキスト内前方照応に 3 種類の下位分類、そしてテキスト内後方照応には複数のケースを挙

げている⁷⁰⁾。田中 (2013) は、常識的共有: 一般常識による共有、文脈的共有: 先行状況、指定可能であることを予期、場面的共有の 3 種類としている⁷¹⁾。このように分類の仕方は一見多様に見えても、大きく分けると談話・言語的文脈、場面、一般的知識や話し手・聞き手の共有知識の 3 種類があり、それらを単独で、もしくは組み合わせることで共有集合が組織されているという点では一致していると考えられる。学習者にとっては、談話・言語的文脈の中でも直接的な前方照応 (I bought a book and a magazine. The book was ...) や the first daughter, the tallest boy などの用法、および直接的な場面 (Pass me the salt) は具体的でわかりやすいが、それらに一般知識が関わってくるとき、一般知識の何を共有知識として想定できるのかの判断がむずかしい⁷²⁾。共有集合の組織化の指導は、DEFINITE/INDEFINITE の次元における冠詞の選択にかかわる重要な課題であるが、一般知識に関わる用法をどの程度まで取り込み、かつどう構造化していくかが鍵になると考えている。

3. まとめと今後の課題

本稿では、冠詞指導の教育内容構成を目的として、冠詞体系の構成要素と構造について検討してきた。これらを踏まえて、本稿が提案する教育内容の特徴は以下のとおりである。

- 1) 冠詞のカテゴリを、a/an, the, 強勢のない some/any, zero 冠詞, null 冠詞で構成すること
- 2) 冠詞体系を COUNT/MASS, EXTENSIVITY, DEFINITE/INDEFINITE の 3 つの次元から成る体系とし、各次元の中にいくつかの素性を設定すること
- 3) EXTENSIVITY の次元を用いて、クラス・種類全体への指示か、その一部への指示かを区別すること
- 4) COUNT/MASS の次元における判断を、数学の分離量・連続量の区別という言語を超えた普遍的なものの見方を基礎として、± divisible ± merge-able と ± homogeneous の素性によって行うこと
- 5) SINGULAR/PLURAL の次元は count の下位次元とすること。従って mass には数の対立がないこ

とを明確にすること

- 6) DEFINITE/INDEFINITE の次元における判断を *± locatable*, *± inclusive* の素性と共有集合の概念によって行うこと

このような特徴をもつ教育内容を、学習者の冠詞の理解や認識の形成に合致するような指導過程で展開していくために、COUNT/MASS, EXTENSIVITY, DEFINITE/INDEFINITE の3つの次元が互いにどのような関係にあるかを最後に述べておきたい。

DEFINITE/INDEFINITE の次元は談話の領域にある。なぜなら聞き手が指示対象を十分特定できるかどうかは、発話の場面や言語的文脈に依存するからである。一方で COUNT/MASS, EXTENSIVITY の次元, SINGULAR/PLURAL の下位次元は、指示対象となるものやことの存在様態に関わる意味論的次元である。定・不定の判断は、どの冠詞を用いるかの判断ではなく、すでに指示対象の存在様態に基づいて話者が作り上げた不定名詞句を、談話の中で定の名詞句として聞き手に提示するかどうかの判断に他ならない。換言すれば、DEFINITE/INDEFINITE の次元での判断は、*the* か *a/an* か *some* か *zero* かの判断ではなく、*the* を使うか使わないかだけの判断であり、それ以前にすでに *a/an* か *some* か *zero* かの判断は済んでいるのである。「不定冠詞形による、ある一定の姿・形を持つ存在としての記述が了解されて初めて、定冠詞形による指示と同定が可能になる」⁷³⁾ のであり、そのため「定冠詞は不定冠詞の認識を前提としており・・・2つの冠詞は、段階を異にする、異なる働きの文法標識」⁷⁴⁾ と捉えることが適切と考える。そうであれば、冠詞体系をとりたてて指導する際には、まず不定名詞句に焦点をあて、話者と指示対象の間で判断される COUNT/MASS, EXTENSIVITY, SINGULAR/PLURAL の次元から始めることになるだろう。その後で定として聞き手に提示するかどうかの判断を DEFINITE/INDEFINITE の次元上の *± inclusive*, *± locatable* の素性を用いて学んでいくことになると思う。

共有集合の組織化の中で、特に何を話し手と聞き手の共有の知識として推定するかは、冠詞選択の問題だけでなく、語用論全体の課題でもある。今後は語用論の領域における前提、含意の研究を幅広く検討しながら、共有集合組織化における聞き手・話し手が共有する一般知識の作られ方、推

測のされ方、活性化のされ方を研究し、定性の指導の中に取り組んでいく必要があると考える。さらに COUNT/MASS, EXTENSIVITY, SINGULAR/PLURAL の次元をどのような順序で提示していくか、また冠詞体系全体の教育内容を学習者の理解や認識の形成に合致するような具体的内容にどのように具現化するかを検討し、実際の指導とその評価に取り組んでいきたい。

注

- (1) 山下 (2013) は、学術論文の英文校正前の原稿の文を例にとり、「温度を変え、磁気相転移を観測した」と書こうとする文を、*We changed temperature and observed a magnetic phase transition* と *temperature* に *the* を用いなかったため、私たちが「自分」の温度を変えた、という意味に解釈されることや、*A surface of a sample* と *The surface of a sample* では、前者が結晶の複数ある面の1つのことを示し、後者は結晶の表面全体を示すという大きな違いがあることを述べている⁷⁵⁾。
- (2) *count/mass* の用語については、*countable* や *non-count*, *uncountable* など用いられるが、本稿では *count* と *mass* を用いる。

文献

- 1) 織田稔：英語表現構造の基礎-冠詞と名詞・動詞と文表現・文型と文構造-。風間書房，東京，p. 3, 2007
- 2) 藤田永祐：エッセイ-不定冠詞をめぐって-。獨協大学英语研究 77: 1-8, 2016
- 3) Chesterman, A.: *On definiteness: A study with special reference to English and Finnish*. Cambridge University Press, Cambridge, p. 40, 1991
- 4) Christophersen, P.: *The articles: A study of their theory and use in English*. Einar Munksgaard, Copenhagen, 1939
- 5) 織田稔：存在の様態と確認 -英語冠詞の研究-。風間書房，東京，1982
- 6) 織田稔：英語冠詞の世界 英語の「もの」の見方と示し方。研究社，東京，2002
- 7) クローズ，R. A. (齋藤俊雄訳)：クローズ現代英語文法。研究社出版，東京，1980
- 8) Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman.: *The grammar book*. Heinle & Heinle

- Publishers, Boston, MA, 1999
- 9) Downing, A.: English grammar: A university course. Routledge, London, 2015
 - 10) 久野暲, 高見健一: 謎解きの英文法 冠詞と名詞. くろしお出版, 東京, 2004
 - 11) 前掲書 9) p. 375
 - 12) Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik: A comprehensive grammar of the English language. Longman, London, pp. 274-275, 1985
 - 13) Carlson, G.: A unified analysis of the English bare plural. *Linguistics and Philosophy* 1 (3): 413-456, 1977
 - 14) Yotsukura, S.: The articles in English. Mouton. The Hague, 1970
 - 15) Leech, G. and J. Svartvik: A communicative grammar of English. Longman, London, pp. 237-238, 1975
 - 16) Swan, M.: Practical English usage. Oxford University Press, Oxford, section 63, 1980
 - 17) Swan, M.: Basic English usage. Oxford University Press, Oxford, p. 43, 1984
 - 18) Huddleston, R. and G. K. Pullum: The Cambridge grammar of the English language. Cambridge University Press, Cambridge, p. 384, 2002
 - 19) 前掲書 12) p. 246
 - 20) 前掲書 9) p. 378
 - 21) 前掲書 3) p. 16
 - 22) 前掲書 3) p. 46
 - 23) Master, P.: Acquisition of the zero and null articles in English. *Issues in Applied Linguistics*, 14(1): 3-20, 2003
 - 24) 関口智子: 英語冠詞指導再考. 専修大学外国語教育論集 44: 145-166, 2016
 - 25) 前掲書 3) p. 25. ff
 - 26) 前掲書 7) p. 42
 - 27) Chafe, W.L.: Meaning and the structure of language. University of Chicago Press, Chicago, 186ff, 1970
 - 28) 前掲書 8) p. 278
 - 29) 前掲書 3) p. 72
 - 30) 前掲書 18) p. 384
 - 31) 前掲書 3) p. 25. ff
 - 32) Hewson, J.: Article and noun in English. Mouton. The Hague, 1972
 - 33) 前掲書 3) p. 27
 - 34) 前掲書 4) pp. 33-34
 - 35) 前掲書 27) p. 186. ff
 - 36) 前掲書 7) p. 42
 - 37) 前掲書 12) p. 275
 - 38) 前掲書 8) p. 278
 - 39) Jespersen, O.: Philosophy of grammar. Allen and Unwin, London, 1924
 - 40) 前掲書 4) p. 26
 - 41) 前掲書 12) p. 246
 - 42) Huddleston, R.: Introduction to the grammar of English. Cambridge University Press, Cambridge, 1984
 - 43) 前掲書 42) pp. 245-246
 - 44) 前掲書 5) p. 28
 - 45) 前掲書 9) p. 365
 - 46) 前掲書 4) p. 26
 - 47) クリストファセン, P. (一色マサ子訳述): 冠詞. 研究社, 東京, p. 9, 1958
 - 48) 前掲書 18) p. 335
 - 49) 前掲書 42) p. 246
 - 50) 前掲書 4) p. 26
 - 51) 前掲書 42) pp. 245-248
 - 52) Wierzbicka, A.: The semantics of grammar. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, p. 506, 1988
 - 53) 遠山啓: 数学の学び方・教え方. 岩波書店, 東京, p. 16, 1972
 - 54) Bloomfield, L.: Language. Henry Hold and Company, New York, p. 205, 1933
 - 55) 前掲書 52) p. 512
 - 56) 前掲書 6) p. 4
 - 57) 前掲書 1) p. 7
 - 58) 前掲書 4) p. 27
 - 59) 前掲書 47) p. 10
 - 60) Lyons, C.: Definiteness. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 2-13, 1991
 - 61) 前掲書 42) p. 250
 - 62) Hawkins, J.A.: Definiteness and indefiniteness: A study in reference and grammaticality prediction. Croom Helm, London, pp. 86-227, 1978
 - 63) Hawkins, J.A.: On in(definite) articles: Implicature and (un)grammaticality prediction. *Journal of Linguistics*, 27:

- 405-442, 1999.
- 64) 前掲書 62) p. 167
- 65) 前掲書 62) p. 168
- 66) 前掲書 3) p. 68
- 67) 前掲書 62) pp. 106-149
- 68) 前掲書 8) pp. 279-280
- 69) 前掲書 9) p. 377
- 70) 石田秀雄：わかりやすい英語冠詞講義．大修館書店，東京，pp. 113-175, 2002
- 71) 田中茂範：表現英文法．コスモピア，東京，p. 43, 2013
- 72) 前掲書 23) p. 9
- 73) 前掲書 1) p. 48
- 74) 前掲書 1) p. 48
- 75) 山下理恵：科学英語文法覚え書き（冠詞について）．表面科学 Vol. 34, No. 1: 46-49, 2013